

たぐみ

Craftsmanship

特集 気鋭作家十二人による作陶展
 特集 民藝運動の作家と職人の仕事展

第51号

濱田庄司スタイルと益子参考館

さる一〇月二日から来年一月二九日まで益子陶芸美術館で『理想の暮らしを求めてー濱田庄司スタイル』展が開かれている。

今まで数多くの濱田の作陶展やコレクション展が催されたが、濱田の陶芸の初期作品や、作陶の糧となった東西の工藝の蒐集に加えて、家族や弟子、職人たちも含めた仕事ぶり、暮らしぶりの全体像が、これほど具体的に紹介されたことはない。

益子の住居の写真や図面をはじめホームスパンの背広やネクタイ、仕事着など、また益子の熊代鍛冶屋に作らせた鉄製のランプシェードや沖繩や益子での昭和初期の作品からは、濱田の目指した新しい生活スタイルの香りが強く感じられる。柳宗悦や河井寛次郎、バーナード・リーチらとの親交もさることながら、しかし私には濱田はやはり関東の人であり、質朴で骨太な造形

家である印象が強い。

今展の図録でも、孫の友緒による「人、モノ、思考が交わるプラスの人生」と、琢司による「田舎の暮らしへの志向とモダンズムの心性」など、濱田家と益子の空気を良く知る一門の人たちによる論稿の切り口は、これからの濱田研究にとってプラスとなるろう。

その濱田庄司の『益子参考館』と周辺の窯場は、不幸にも先般三月一日の東日本大震災によつて甚大な被害を受けた。この再建については益子町をはじめ濱田の人柄と仕事を慕う人たちによつて再建基金が設立され、またさらなる募金の活性化を願つて『濱田庄司スタイル』展の前日、オープニングレセプションが開かれた。

参考館では濱田晋作館長も元気で来客を迎え、館の周辺では益子の若い物づくりたちによる募金協賛の市が催されて活況であった。我々にとつて身近な陶芸の郷、益子と参考館の速やかな再興を願つてやまない。(志賀直邦)

―益子・北関東の陶業被災を超越して―
気鋭作家十二人による作陶展



作家名

| | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 井上 | 後藤 | 野村 | 笠原 | 塚田 | 加藤 | 浜田 | 島岡 | 石川 | 島岡 | 大塚 | 和田 |
| 淳平 | 竜太 | 朋香 | 良子 | 広幸 | 陽子 | 英峰 | 桂 | 雅一 | 龍太 | 茂夫 | 安雄 |

会期

平成二十三年十一月一九日(土)～二八日(月)
十一月二〇日(日)、二三日(水)、

二七日(日)は営業いたしません。

会場

たくみ二階ギャラリー

営業時間 一時から一九時まで

(日曜、祝日、最終日は一七時半まで)

今年三月と四月に予定されていた浜田英峰、井上淳平さんの作陶展が、三月一日の東日本大震災によって中止となりました。井上さんは島岡窯修業のち初の個展でお気の毒なことでした。今回の十二人展は両君を含め、島岡達三、合田好道、瀧田項一門下の気鋭の作家による会です。どなたも東日本大震災では窯や仕事場が被災し、今なお再建途上であります。しかし作品はいずれも普段の暮らしのための器ですからお楽しみいただけます。ご支援のほどお願い申し上げます。

濱田庄司の初期作品と作家による量産の仕事

志賀 直邦

身の器などについては、十代終りのころの記憶にはさして残っていない。父親の飲み友達で、ご近所に住んでおられた武者小路侃三郎さんが後

年、「君のところには濱田さんの陶器がたくさんあってね、それが君のおやじさんと吉祥寺で飲み歩いているころみんな飲み代に取られてしまったのを覚えてるかい。」といわれ、その陶器がどんな品だったのかほとんど頭に



中鉢(セントアイヴス窯、大正12年)

浮かばなかった。それは一九四八年(昭和二三年)あたりの、まさに戦後の復興期ごろの話だったと思う。

ところで、私が大学を出てたくみの仕事をするようになった一九五五年の頃、濱田庄司先生の作品は抹茶碗と水指を除いてはあらかじめ桐箱をつけることはなかった。作者の署名や極め書きを記した桐箱は、たくみでは作品に添えて販売することはほとんどなく、購入者の希望があればその都度、濱田先生にお願いをしていた。先生の抹茶碗はそのころ確か売価四千元くらいだったと思う。

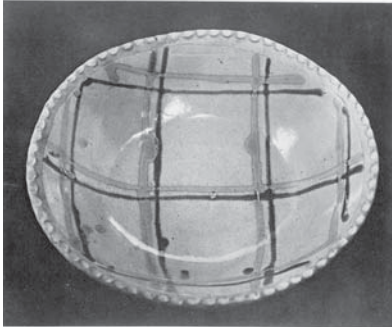
河井寛次郎先生の作品は京都という土地柄もあってかはじめから箱書つきだったが、桐箱入りで持ち帰る方は半数もなかったと思う。所得も安かったがモノもそうあふれてなく、買えばすぐ使う、そういう時代であった。思い

だしてみると店頭の河井作品は多くが香炉、菓子鉢、小花立、蓋物、土瓶、湯呑、小皿、ぐい呑、灰落など日用座右の品がほとんどであった。

そのころ家には濱田さんだけではなくて河井寛次郎や富本憲吉の食器も、数は多くはないが皿や紅茶碗セツトなど使っていた。しかし飲み屋の女将に、ツケ代として濱田作品をあらかじめ巻き上げられたという話は、いかにもおやじらしくて納得したのであった。それらの濱田作品は想像するに中小の壺や食器であり、多くは箱書がないからおそらく飲み屋の棚に飾られ、上客の席に用いられたりしたにちがいない。



さて、芹沢銈介、棟方志功を含め民芸運動の巨匠といわれる方たちの作品は、先生方が海外のピエンナーレで受賞され、あるいは文化功労者、文化勲章を授与されるに及び、美術品化して実用の場からすっかり離れてしまった



盛器(益子佐久間窯、昭和3年)

かというところ、そうとばかりはいえない。富本、河井、濱田、芹沢、棟方の五人の巨匠の方々は、柳宗悦の民藝運動の仲間であっただけに、自らの制作活動のなかで、人々の日常の暮らしに用いられる実用の品々の創作と頒布にかなり心を砕いた時代があった。富本の場合、一九三二年(昭和七)、瀬戸の品野窯での、石皿風の鉄描大皿(径37、7センチ)八〇枚の頒布会の仕事などその試みのさきがけであった。ロクロと焼成は職人だが絵付けは



香炉(益子窯、大正6年)

富本で、私が確認した模様は、春夏秋冬紋と笹紋で、裏に大きめの富の字の署名がある。また一九二九年、信楽神山窯で汽車土瓶の身と蓋に鉄描で数多くの絵を描き、安価で販売したといわれるが、いまでは若干の蓋しか残っていない。そのほかの仕事では、瀬戸その他での白磁に染付と色絵の仕事がある。これらは富泉の印名のある量産品を除き、多くはその年限りの試みであった。

河井は、一九五七年(昭和三二)、

たくみ企画の工芸品頒布会に、呉須釉花紋ぐい呑千個を制作、濱田もまた各種湯呑を同じく千個制作した。(この頒布会は私が担当した)。この頒布会はしかし、一客あたり販価500円(送料込)、作家原価(桐箱入)300円というサービス価格であったから利益はあまりなかったが完売し、河井、濱田の作品を一般にサラリーマンに普及するという意味で話題を呼んだ。これらの頒布会用作品は、当時から個展作品との区別はなく先生方の量産品としては特筆していいと思っている。

濱田や河井、富本が、量産の品としてしばしば作ったのはほかに着物の帯止めがある。これも戦前から戦後の一時期にかけて人気であった。

◇

濱田庄司は柳宗悦の昭和初期からの同志のなかでは、染色工藝家の芹沢銈介と並んでもっとも量産に心を寄せた作家であった。陶芸と染色とは素材、技法ともまったく異なるが、しかし工



醤油注 (河井寛次郎窯、大正15年)



片口 (琉球窯、昭和2年)

芸という分野において類似、共通するところはきわめて多い。つまり基本的に実用を旨とするから材料は地元で調達が可能であり、幾つもの工程、協業によって地方的特色が出やすく、需要もまた一定の広さを持つ。つまり民藝である。

濱田は一九三二年(昭和六)、益子に三室の登り窯を築き、制作の拠点を置いてからはさまざまな作業、工程で地元の専門職人の手をかりた。そのことはまた益子などの窯業産地の特色で

もあつたのである。

濱田の初期の仕事としては、一九三三年(大正二二)のイギリス・セントアイヴス窯、一九二六年の京都の河井寛次郎の窯、一九二五年と二七年の琉球窯での制作、そして一九二四年から一九三〇年(昭和五)にかけての益子の佐久間窯などでの制作がある。これらの作品を収蔵家から集めて『濱田庄司陶器集』と題する写真集が一九三三年に出版された。B4版、手織木綿の表紙に、本紙は手漉き和紙、

写真版は全87図という大変に贅沢な豪華本である。

青山二郎による編集、工政会倉橋藤治郎による出版とあればうなずけるのだが、この作品集は今日なお濱田の原点を知るにもつともふさわしいものと思う。今号のたくみ誌でもこのなかから幾つかを紹介したい。とくに濱田の卓上食器のなかでもユニークな形態と実用性で知られる醤油注は一九二六年の河井窯での作だが、次は一九四二年の自邸窯出しの醤油注の話。

実は私の高校時代の恩師岩崎英二郎先生からうかがったのだが、氏が東大生のころ、軽井沢の家で使う食器を母上に連れられて益子の濱田庄司の窯出しで選んだという。すでに世界大戦たけなわで都内には良い食器がなかったのだといわれた。その後東京の本宅が空襲で焼け、戦後に建て直してから食器を軽井沢から運び、今もって愛用しています。とくに醤油注は毎日の食卓には欠かせません、と話された。因み

に氏は河井寛次郎初期作品の蒐集でも知られる静嘉堂文庫美術館の創始者岩崎小弥太の曾孫にあたる。岩崎家が日常の器に濱田の作を用いていたとは流石といえないだろうか。

それともう一つ、濱田の幅広い陶業のなかでわりに知られていない試みを記そう。実はこの話は本誌たくみ38号で「傷兵と陶器」というタイトルです。でに紹介済みなのだが、要約すれば一九四四年(昭和一九)のこと、医学博士式場隆三郎の斡旋で、戦争での負傷兵を統括する軍事保護院から、各地

の保護院で使用するための大量の食器の製作依頼があつた、ということだった。濱田はいう。「何しろ量が問題だった。いかに益子でもこの時勢に三万組十五万個をおいそれと引き受けられはしない。資材と労力からいっても、困難は伴う。しかしこれは利害を無視し、奉仕してもやらねばならぬ仕事だと思つて引き受けた。」続けて「試作は無理していいものを作つたわけではない。大体私の窯と佐久間君の窯で、第一回の一万五千組を年内にあげる計画をたてて準備をすすめている。」

掲載した試作5点セットの写真をみると戦後一貫して作られてきた濱田窯の、食器シリーズの原型といつてもいい。この仕事がその後どう展開したかについては二、三の説があつて、一九四四年末から翌年八月の敗戦にかけて栃木県でも大田原の陸軍飛行場が爆撃されたくらいだから、軍事保護院に納入されたのは契約の一部でしかなかったろう。それにしてもこの大量の食器造りの経験の蓄積が、戦後の濱田の仕事の復興にとつて大きな力となつたことは疑いない。



軍事保護院依頼の負傷兵用
5個組食器(昭和19年)

「くば団扇」のはなし

瀧田 項一

今夏は節電が称えられて、扇子や団扇が世に姿を現わした。いままで忘れられそうになっていたものが、時代の寵児になった如くに、宣伝用の団扇を街かどで配り、人々が持ち歩く光景は長い間みられなかった。

折角、団扇をもう一度見直してみろ、良き機会ではないかと思ってみた。ボクは丸亀のあの太振りの真ん丸の団扇を愛用している。大胆に色分けしたのが好ましい。また堅固な房総のうちわもいとおしい。



沖縄の「くば団扇」

竹を剥いで骨を組み紙を貼ったの工程は手間がかかるわりに安い値であるが、夏の夕涼みに盆踊りには欠かせぬものである。

団扇の中で特筆したいのは、沖縄の「くば団扇」である。何の飾り気もなく、なんの工夫も無い。荒物の領域にとどまっているが、美しい南の島の形である。

芹沢先生が着物模様の模倣として見事に捉え活き返らせた図柄は傑作のひとつである。

「くば」の葉は棕櫚（しゅろ）に似た椰子科の樹で、扇状に開いた葉をうまく用いただけの団扇であるが、ボクは長く愛用している。夏が過ぎると壁に吊り下げてその形を楽しんでいる。この風は遠い南の邦、琉球の風を呼ぶのである。

（筆者は鳥山在住、陶芸家）

たくみ特別展

民藝運動の作家と職人の仕事展

会期 平成二十三年二月三日(土)～二二日(月)

(二月四日、一日の日曜日は営業いたしません。)

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 一時から一九時まで(日曜、最終日は一七時半まで)



花紋湯呑 (河井寛次郎)

柳宗悦によって民藝品の健康で日常的な美しさが広く紹介されてから八十余年、その間どれほど多くの工人や作家たちが励まされ、志に目覚めて、日々の生活文化を豊かにしてきたことでしょうか。たくみではこの度も永年の民藝愛好家の協力を得て、これ

らの作者たちの旧作品を集め展示、即売いたします。どうぞお楽しみください。

↑ 作家 ↓

濱田庄司、バーナード・リーチ、芹沢銈介、島岡達三、木研兎、河井寛次郎、金城次郎、川上澄生、そのほか

↑ 品目 ↓

陶磁器、民窯古作品、掛軸、版画額装、海外の布と古陶雑貨ほか

↑ 書籍 ↓

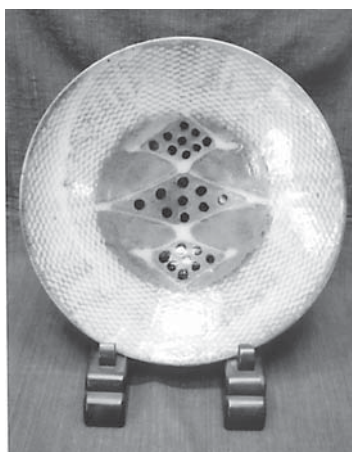
柳宗悦選集、初版本船筆筒、私版本木喰上人の彫刻ほか、工藝、美術関係図書、図録ほか一般図書



絵皿（メキシコ）



ローソク徳利（丹波立杭焼）



象嵌大皿（島岡達三）



版画 少女像（川上澄生）



山水絵蓋物（益子焼）



版画 酒と煙草（川上澄生）



神像 (インドネシア)



風見鶏燭台 (インドネシア)



馬の目皿 (瀬戸焼)



土瓶 (福岡野間窯)



スリッ釉ピッチャー
(船木研児)



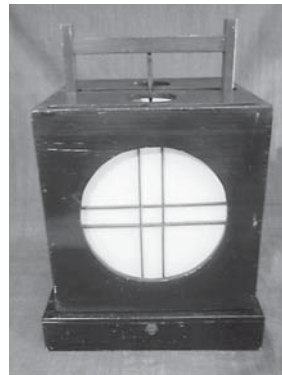
鳩文飾皿 (船木研児)



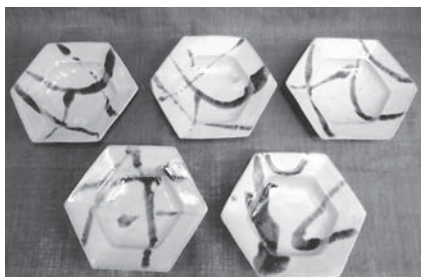
象嵌花瓶 (島岡達三)



水鳥図飾皿 (船木研児)



行灯 (古民藝)



六角小鉢 (濱田庄司)



版画 蚕船図 (川上澄生)



番茶器揃五客組 (濱田庄司)



版画 つげ文 (川上澄生)



多彩花文タイル (トルコ)



キリム (トルコ)



多彩花文タイル (トルコ)



キリム (トルコ)

たくみ歳時記

芹沢銈介カレンダーのこと

今年も芹沢先生の型染カレンダーが出来あがりました。先生のカレンダーは自ら「型絵紙染暦」または「絵暦」と名付けられただけあって、まったく独自のものです。

年間一二月に表紙をつけて一三枚が、四季の風景、暮しの行事や祭りが、

お伽話、草花や郷土玩具など身辺のあらゆる対象から題材をとり、一年をとおして楽しめる美しい暦として表現されています。

海外でも昔から広く愛好の方々があつて、今年も大判の型染版と小さい卓上版が作られています。型染版は売り切れることもありますので、早めに申し込み下さい。



芹沢銈介型染カレンダー
 型染版(上写真) 16,275円
 小型卓上版 1,103円

あとがき

三・一一の東日本大震災以降、天候、人心とも不順に感ずること多く、落ち着かない半年余りであった。

さて、「たくみ」誌へは今号掲載の瀧田項一先生ほか近藤京嗣、嶋本裕子氏らから寄稿いただいたが、今号は展示会企画のため誌面の余裕がなく次回掲載の予定である。

震災以降、みんなげい、手仕事、たくみの手技など、当社の創業来の使命である仕事に注目いただいている。いまは、モノがいらぬのではなく、佳いものを見極め、大事に、わが子を育てるように末永く使うこと、暮しとモノが調和することが大切である。心がいやされる本物の仕事をしていきたいと思う。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)